産経新聞　朝刊　和歌山版　2024年1月7日

くじら日記

太地町立博物館から

クジラ模型ほこり落とし

緊張の作業、古式捕鯨思いはせ

太地町立くじらの博物館の年末恒例の大掃除、通称「セミクジラのほこり落とし」を、昨年12月19日に行いました。開館前の午前7時半から設備清掃員や学芸員、飼育員、事務員の十数人が集まり、はたきやモップを手に取りました。

まずは、博物館本館の掃除から。本館は回廊状で、中央が吹き抜けになった建物です。その吹き抜け部分にあたる大ホールには、シャチやコククジラなど、6点の全身骨格標本が展示されています。さらに見上げると、太地町発祥とも言われ、江戸時代から270年以上続いた古式捕鯨の様子を再現した実物大模型を望めます。色とりどりに装飾されたクジラを捕るための木造船「勢子船」の模型と、この船を漕ぐ筋肉隆々の勇ましい鯨捕りの模型、そして鯨捕りが狙う巨大なセミクジラの模型（体長15・2メートル、最大胴周囲13メートル）です。

それらに積もったほこりを、組んだ足場や通路から、傷をつけたり壊したりしないように、慎重に払っていきます。

中でも緊張感が漂うのは、セミクジラの模型のほこり落としです。全身のほこりを落とすためには、高さ約9メートルにつり下げられたセミクジラの模型の背中に登らなければならないからです。ヘルメットをかぶった職員が、2階通路からはしごを使って登り、館内の柱に結んだ縄を命綱にして、モップをかけます。筆者もこの作業をした経験がありますが、その高さに背筋が凍りそうでした。同時に、全長の4分の1ほどをも占める頭や、広くどっしりとした背中など、セミクジラの大きさや力強さを肌で感じました。そして古式捕鯨時代の鯨捕りの花形「羽指」が見たであろう当時の光景が目に浮かんだことを覚えています。

セミクジラの模型の背中に登ってほこりを落とす作業―昨年12月19日、太地町立くじらの博物館

羽指とは、クジラを銛や剣で狙う人のことで、「羽差」または「刃刺」と記されることもあります。羽指は勢子船の指揮をとり、次々と銛を放ち、クジラを弱らせます。クジラの動きが鈍ると、羽指の見習い「刺水夫」が海に飛び込み、クジラまで泳いで近づきます。そして刺さった銛を手がかりにクジラによじ登り、背中にまたがるのです。さらに包丁を手に取り、クジラの2つの鼻の穴の隔壁を切って綱を通す「鼻切り」をやってのけるのです。もちろん、はしごも命綱もありません。この危険な作業を成し遂げた刺水夫は晴れて羽指を名乗ることができるのです。

かつての鯨捕りに思いをはせつつ1日かけて1年分のほこりをしっかり落とし、大掃除を無事に終えたのでした。

（太地町立くじらの博物館　館長　稲森大樹）